

霞

- 2010年度夏季展示室だより -

土浦市立博物館

平成22年7月1日発行(通巻第12号)

当館では「霞ヶ浦に育まれた人々の暮らし」を総合テーマに、春(5~6月)・夏(7~9月)・秋(10~12月)・冬(1~3月)と季節ごとに展示替えを行っております。本誌「霞(かすみ)」は、折々の資料の見どころをご紹介します。展覧会や講座のお知らせ、市史編さん事業や博物館内で活動をしている研究会・同好会などの情報もお伝えします。

古写真・絵葉書にみる土浦(12) 絵葉書

「土浦銭亀橋附近洪水氾濫の景」 明治43年頃



目次

古写真・絵葉書にみる土浦(12)・・・	1
博物館からのお知らせ・・・	1
【館長講座・土浦ミュージアムセミナー他】	
古代の硯(古代)・・・	2
小田家14代 小田政治(中世).....	3
関 信臧肖像(近世)・・・	4
真鍋国民学校児童の慰問文(近代)...	5
霞ヶ浦の漁具(近代)・・・	6
市史編さんだより・・・	7
「霞」短信 また来てみたいまち・土浦...	8
コラム(12)・・・	8
情報ライブラリー更新状況・・・	8

明治43(1910)年8月の大洪水での銭亀橋付近(現大町、下高津二丁目付近)の様子です。桜川が増水し、橋脚は水没してしまっています。土浦消防組の印半纏しるしはんてんを身につけた人々が大八車だいはちぐるまで土のうを運び、復旧作業にあたっているようです。旧土浦町から旧中家村なかやむらを望んだ一葉。【情報ライブラリー検索キーワード「明治43年水害・洪水」】

博物館からのお知らせ

館長講座(茂木雅博館長)

7月18日・8月15日・9月19日(全て日曜) 時間:午後2時から

今年度は、平城遷都1300年記念特別講座と題し、日本の古代を振り返ります。 ところ:博物館視聴覚ホール

土浦ミュージアムセミナー

土浦地域の歴史について、学芸員の研究成果を紹介します。

7月3日(土)「沼尻修平 墨僊に影響を与えた従兄の横顔」

7月10日(土)「人物を語り継ぐ 沼尻墨僊の場合」

7月17日(土)「水郷の土浦 昭和時代初期の観光」 時間:各回午前10時から11時半まで

ところ:博物館視聴覚ホール 定員:各回50人(要申込み) 受講料:各回50円(資料代)

夏季展示解説会

夏季展示の見どころを、学芸員がご案内します。

7月3日(土)「霞ヶ浦の漁具 昔と今の様相」 時間:午後2時から(30分程度)

7月24日(土)「古代の硯 文字を使った人々」 ところ:博物館展示室3

8月7日(土)「真鍋国民学校児童の慰問文 戦時下の小学生」

8月28日(土)「関信臧 土浦藩の砲術指南」

9月4日(土)「小田家14代小田政治 小田氏最大の勢力図を築く」

夏休みファミリーミュージアム テーマ展「むかしの道具あれこれ」

展示案内会 7月25日(日)・8月14日(土) 時間:午後2時から(30分程度)

2010年度夏季展示「霞ヶ浦に育まれた人々の暮らし」は、7月1日~9月下旬までとなります。「霞」第13号は10/1(金)発行予定です。



博物館マスコット

亀城かめくん

お知らせ欄の行事・日程は一部変更となる場合がございます。

古代の硯

- 文字を使った人々

土浦市田村・沖宿遺跡群の石橋北遺跡から出土した硯（下の写真）をご紹介します。全体の5分の1くらいの破片資料で、もとは脚のある丸い形の硯（円面硯・下図参照）で、石ではなく須恵器と呼ばれる「やきもの」で作られています。

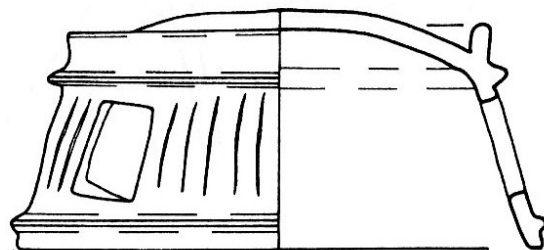
中国では古来より文房四宝と呼んで、筆、墨、硯、紙の4種の文房具が珍重されました。とくに硯は、その石の質感や色、造形の美しさから美術工芸品としても大切にされ、多くの文人に珍重されたといわれています。中国では、硯に最も適した石材として、唐の時代に発見された端溪石が有名です。日本が中国に倣って石の硯を用いるようになるのは鎌倉時代になってからで、それ以前は、平城京跡をはじめとして全国の奈良～平安時代の遺跡から陶（やきもの）や瓦で作られた硯（陶硯、瓦硯）が出土しています。

石橋北遺跡は平安時代（9～10世紀）の集落跡で、竪穴の住まいのほかにも多数の掘立柱建物群が見つかったのが特徴です。出土した須恵器の硯も9世紀代のもので、このほか多量の灰釉陶器、三彩陶器、皇朝十二銭の神功開宝など近畿地方など中央からの品々も出土しており、倉庫と思しき掘立柱建物群のありようから内海の霞ヶ浦に面する物資の集積地だったのではないかと考えられます。須恵器の硯も使われた粘土の質感からみて当地産ではなく、近畿地方周辺からの将来品と思われる。また、この遺跡からは、僧侶が用いる鉄鉢形土器や火葬墓なども発見されており、隣接する平安時代の集落から見つかった仏堂跡などから考えて、比較的ひんぱんに僧侶が往来する遺跡の性格も想定されます。

古代における硯、墨、筆など文房具の使用は、律令政府の基本が文書行政であったことから、第一に役人の世界での不可欠な道具でした。一方、鎮護国家の支柱として仏教が興隆した古代律令国家にあっては、写経を旨とする僧侶の必需品でもありました。石橋北遺跡においても、硯の使用は物資を管理する役人と、村々への布教活動に専念する僧侶との双方が想定されます。出土した硯は中央の「陸」の部分欠損し、磨墨の様子については判然としませんが、残存部分からみて比較的使用頻度は低かったかと思われ、将来品としてとくに珍重され、きわめて特定の使用に限られたものではなかったかと推測されます。（塩谷修）



石橋北遺跡出土の須恵器円面硯
（推定直径20cm）



茨城町奥谷遺跡出土の須恵器円面硯立面実測図
『茨城県資料考古資料編 奈良・平安時代』より

7/24(土)午後2時から
このページで紹介した
資料の展示解説会を開催
いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。
根鹿北遺跡出土の瓦塔・瓦堂（古代・中世コーナーに展示）



小田家 14代 小田政治

- 小田氏最大の勢力圏を築く

政治は小田 12代成治の子で、明応元（1492）年に生まれました。同5（1496）年、政治の長兄治孝（小田家 13代）と次兄顕家が内紛を起こし、顕家が治孝を殺害してしまいます。この時、政治はまだ幼少の身であったことから、信太・菅谷・田土部などの小田本宗被官等が政治を守護し、加えて真壁真楽軒（注1）に助勢を求めています。結果、顕家は討たれ政治が永正7（1510）年に14代小田城主として家督を継ぎました。

相続争いに決着をつけた政治は、近隣諸国から自領を守ることが先決であったと思われます。そのため、古河公方家の後ろ盾を得るため公方家の内紛（注2）に関与し、一方で妹を佐竹義篤の正室として嫁がせて友好化を図っています。また、長らく実現していない旧領回復のため、信太庄東部の土岐原氏と河内郡・東条庄をめぐって抗争、享禄4（1531）年には鹿の子原（現石岡市）で江戸通泰と戦って敗走させています。さらに、天文6（1532）年には結城政勝と戦って敗れますが、同7年には宇都宮俊綱（後に尚綱、母は小田成治の娘）とともに芳賀高経を攻めて高経を捕虜とし、同8年には宇都宮俊綱、佐竹義篤とともに那須高資を烏山城に攻めるなど、多方面にわたって隣接武将と戦を行っています。これにより小田氏の勢力範囲は、信太庄西部・南部、小栗御厨、中郡庄にまで及び、国人領主級から戦国大名へと成長しました。しかし、同14（1545）年の河越夜戦（注3）では、古河公方の足利晴氏方に味方して敗れ、北条氏康の脅威を前にして同17（1548）年57歳で没しています。

政治の肖像画は、豊縁が緑青色で雲形模様のある上げ畳に、縁が焦茶色で唐草模様のある褥を敷いて坐禅を組むようにして座っています。服装は花模様のある襦袢に黒の法衣のような着物をまとっています。付帯する品物は、柄の長い団扇と黒漆塗りの帙に書物が1冊置かれ、腰には鐙を付けない黒漆

塗りあわせくちしらすえ ながわきさし
塗合口拵の長脇指を差しています。顔立ちは、月代を大きく剃り上げて茶筌鬘風にし、口髭と顎鬚を程よく生やし、眉毛は少し吊り上げざみで眼光鋭く、いかにも戦国武将といった堂々たる風貌がうかがえます。

肖像画の上部には叔悦禅憚（注4）が寿像賛をしたためであり、これにより大永2（1522）年政治30歳の肖像画であることが分かります。（中澤達也）

（注1）真壁治幹か。政治は真壁氏に父成治の庇護と小田本宗への加勢を要請している。

（注2）古河公方足利政氏と嫡男の高氏（後の高基）が古河公方の地位を争う（永正の乱）。これにより関東各地で戦が頻発し、政治は初め政氏に属したが、真壁治幹の誘いにより永正11（1514）年に高基方に転ずる。

（注3）山内上杉憲政・扇谷上杉朝定・足利晴氏の連合軍が、北条氏の河越城を包囲。夜間に戦闘が行われ北条氏康軍の勝利となる。

（注4）鎌倉にある臨濟宗円覚寺150世住持。天文4（1535）年没。



「小田政治肖像画」（部分）法雲寺蔵 県指定文化財

9/4(土)午後2時から
このページでご紹介した
資料の展示解説会を開催
いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。

小田みかたのちり（複製） 関東幕注文（複製）

多賀谷祥聯書状（複製）（古代・中世コーナーに展示）



関信臧肖像

- 土浦藩の砲術指南 -



「関内蔵助信臧 肖像画」

土浦田宿町の町人色川美年（1813～62）は、兄三中（1801～55）と協力して31年間に及ぶ日記を残しています。天保10（1839）年8月18日の日記の中で、土浦藩士の死を次のように悼んでいます。

関内蔵助様が亡くなった。享年四十九。まことに土浦藩の柱石になる方と思っていたが、風前の露と消えてしまった。この二、三年は土屋家の経済面をずいぶん助けておられ、あと四、五年程たてばどんなに藩政も回復することだろうと領民も期待して慕っていたのに、このようにはかなくなってしまうとは、まるで闇夜にともしびを失ったように心細い気がする。（現代語訳は筆者）

土浦藩のいしずえとして頼みにしていた人がなくなってしまったと美年が落胆しているのが、今回ご紹介する肖像の主、関内蔵助信臧です。肖像では右手に火縄銃を持ち、左手には火縄をまきつけ、片膝を立てた勇姿で描かれています。

信臧は寛政3（1791）年、土浦藩の家老をつとめる一色家の四男として生まれました。幼名を昇といい、11歳で関家入門し、砲術修行につとめました。関家の先祖は上杉藩の家臣で、丸田九左衛門盛次に砲術を学び、以後代々砲術家

として土屋家に仕えました。信臧は16歳の時に関信貞の養子となり、関家三百石を相続しました。文政3（1820）年9月、土浦藩領中貫原で行われた町打ちでは藩主臨席のもと、大筒の射撃を成功させています。信臧は藩政にも大きく関与し、文政5（1822）年に側用人に就任、天保9（1838）年に9代藩主土屋彦直の隠居後、17歳で藩主となった寅直を助けて土浦藩の財政面を担いました。天保の飢饉に悩まされますが、藩校郁文館の整備と藩政改革の準備に取り組みました。郁文館は寛政10（1789）年には土浦城二の丸で開校していましたが、学問の中心となる教授を刷新し、より広い敷地へ建物を新築するなどの改革を推進したのは側用人大久保斐（1798～1859）と信臧でした。

残念ながら信臧は郁文館の落成を見ることなく没し、無事新しい建物が完成して盛大な落成式が開催されたのは信臧の没後2ヶ月たった天保10年10月のことでした。郁文館の完成とその後の藩学の隆盛を見ることなく志半ばで亡くなった信臧は、一色家のたつての願いにより、関家の墓ではなく神龍寺にある一色家の墓所に眠っています。

なお、伝来する関家文書3,156点の目録『土浦市史資料目録第20集 土浦の古文書』を刊行いたしました。博物館の受付でご覧ください。（木塚久仁子）

<p>8 / 28（土）午後2時からこのページでご紹介した資料の展示解説会を開催いたします。</p>	<p>下記の資料もあわせてご覧ください。 大筒 銘「谷神」（近世コーナー「関流砲術」に展示） 大筒 銘「抜山銃」（近世コーナー「関流砲術」に展示） 町打図（近世コーナー「関流砲術」に展示）</p>
--	---



真鍋国民学校児童の慰問文

- 戦時下の小学生 -

国民学校は昭和 16(1941)年4月に小学校を改めて成立した初等教育機関です。初等科6年・高等科2年からなり、学校体系上の変更はありませんでしたが、戦時体制への即応と皇国民の基礎的練成(心身をきたえてつくりあげる)が目的とされ、教科が再編成されたり、儀式や学校行事などが強化されました。子供たちは「少国民」と呼ばれ、出征兵士の見送りや兵士への慰問文を書くことが大切な仕事とされたのです。

博物館では、真鍋町から出征した兵士に宛てて、真鍋国民学校(現真鍋小学校)の児童が贈った昭和 17~18 年の慰問文を所蔵しています。写真は初等科3年生のもので、クレヨン画とともに次の文章が寄せられています。

明けましておめでとうございます 私たちはお正月はとにもぎやかでした 兵隊さんたちとはねつきをしたいとおもいますが 兵隊さんはいま戦地ではたらいいますから兵隊さんたちとやれませんので私はつまらないとおもいます では兵隊さんおからだをたいせつにしてください 私もたいせつにしますから 兵隊さんさようなら

一部を現代かなづかいに改めました

お正月の様子を報告しつつ、戦地で働く兵士の体を^{きづか}気遣う内容になっています。日々の出来事や行事について日記風に記すというものが他にもみられ、書き方の指導があったことが^{うかが}窺えます。ほかに「祈武運長久」と書かれた書道作品もあり、作文以外も慰問文として送られたようです。

次は初等科6年生の慰問文です。

兵隊さんへ 入梅も過ぎ、今日からはりとはれた気持ちのよい日です。大東亜戦争始まって三年といふ月日がたちました。兵隊さんは毎日前線において血まみれになってお働きのことでしょう。毎日の新聞やラヂオをきいて兵隊さんの御苦労を思ひます。...(中略)...学校では兵隊さんの武運長久をおいのりますからぜひとも米英をやぶって来ださい。 原文のまま

戦況についてもふれた、兵士を激励する内容です。太平洋戦争(大東亜戦争)は昭和 16 年 12 月にはじまり、徐々に長期化の様相を呈していきました。その間の「米英撃滅」「必勝の信念」などの精神教育の一端が、この慰問文にはあらわれているようです。

慰問文は兵士とともに郷里に戻り、後に博物館に寄贈されました。日常の中に戦争があり、子どもたち一人一人も関わりをもっていた時代があったことを、慰問文は私たちに教えてくれます。(宮本礼子)



「真鍋国民学校初等科3年生の慰問文」

8/7(土)午後2時からこのページで紹介した資料の展示解説会を開催いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。

慰問袋、防空頭巾、木銃

(いずれも近代コーナー「戦時下の教育」に展示)



霞ヶ浦の漁具

- 昔と今の様相 -

霞ヶ浦は、昔から現在に至るまでこの地域に住む人々にとって重要な漁場でした。

土浦周辺の遺跡の発掘調査でも、漁業関連の資料、特に土製の網の錘^{おもり}が出土することがあります。例えば縄文時代には、土器の破片に刻み目を入れて再利用した土器片錘^{どきへんすい}がありますし、古墳時代には孔^{あな}をあけた球形の素焼きの土玉^{どたま}が網の錘として利用されていました。中世の遺跡からは、現在の網と同じ形状の小型の錘が出土しています。

縄文時代後・晩期の遺跡である市内の上高津貝塚^{かみたかづ}は、捨てられた貝殻により遺存条件がよく、鹿の足の骨で作ったヤスやモリなどの刺突具^{しとつく}、骨製の釣り針などが出土しています。分析の結果、出土品の9割以上はヤマトシジミ、魚類の採取量はハゼ科、コイ科、ウナギ、スズキ属の順でした。このことから、土浦周辺の霞ヶ浦は汽水^{きすい}(海水と淡水の中間的な濃度の水)域に当たり、魚類に限るとワカサギなどの一部を除いて現代とかなり共通していることが分かりました。

明治時代に入ると、坂村(現かすみがうら市)の折本良平^{おりもとりょうへい}らによって風の力で船を横にすべらせる帆曳き網漁^{ほびき}が発明され、少ない人数で大きな漁獲をあげることが可能になりました。また、帆曳き船で霞ヶ浦の沖へ出る以外にも、市内の漁師たちは小船に乗って、霞ヶ浦の岸边で漁をしていました。彼らは漁師であるとともに、漁具を製作する職人でもあり、竹製を主とする漁具の一部は博物館にも伝えられています。次にその代表的なものをご紹介します。

「鮒釜^{ふなうけ}(ふなせん)」と「鯉釜^{こいうけ}(こいせん)」は、4～5月の産卵期に水草の繁茂した岸边に産卵に来るフナやコイを捕らえるための仕掛けです。「おげ(かぶせ)」も同様の道具ですが、設置するのではなく上からねらいかぶせてつかまえる点が異なります。「エビダル」は、餌を入れたわら製のツツコを内部に入れておびき寄せ、エビがかえしをくぐると出られない仕掛けになっています。「どじょうだる」も同様ですが、出口側の紐を解くと内部の魚をすべて吐き出せるようになっています。明治から昭和50年代前後まで、これらの漁具は盛んに用いられました。

現在の霞ヶ浦では、「網いけす」による鯉の養殖や、イケチョウガイを使った真珠養殖などが行われています。川エビやハゼ類は湖沼内では全国1位の漁獲高(魚類全体では全国4位)を占めています。昭和40年代以降進んだトロールなどのエンジンによる機械引き漁業や、常陸川水門による海水の遮断^{ひたちがわ}、近年のブラックバスやブルーギルなど外来肉食魚の増加は、霞ヶ浦在来魚の生態系に大きな変化を与えており、今後の影響が注目されるところです。(比毛君男)



写真左
「鯉釜(こいうけ、
こいせん)」
写真右「どじょうだる」

7/3(土)午後2時から
このページで紹介した
資料の展示解説会を開催
いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。
「湖川漁略図并収穫調書」
錨
エビダル(未完成品)(近代のコーナーに展示)



市史編さんだより

～ ～ ～ 盆綱で迎える佐野子のお盆 ～ ～ ～

「ごーざった、ごーざった、ほとけさまごーざった」遠くに聞こえる子どもたちのかけ声。今日は8月13日お盆です。迎えた仏様を乗せた盆綱が間もなくやってきます。

私が生まれ育った実家のある佐野子地区には今なお、盆綱という行事が伝えられています。毎年8月13日朝から、子どもたちは地区のお年寄りから教えてもらいながら、糞わらを使って龍を型どった盆綱を作ります。夕方になると、子どもたちは出来上がった盆綱を持ち、墓地まで仏様を迎えに行きます。その後集落の家々を廻り、迎えた仏様を降ろしていきます。私は他所へ嫁いだ今でも家族と共に実家に出向き盆綱を迎えています。

家々ではこの13日の日までに仏様を迎える準備をします。

まず「堂なぎ」といって各戸が必ず参加し町いっせいに小山・五輪塔・共同墓地・石塔場の清掃をすることから準備が始まります。以前は8月6日でしたが、現在は8月の第一日曜日に行っています。

13日には餅つきをし、家の中に盆棚を作ります。盆棚は新盆の家では三段飾りにしますが、一般の家では仏壇の前に白布をかけたテーブルという簡単なものが多くなりました。そこに位牌・遺影・供物・線香立て・鉦かね・水・本膳等が置かれます。本膳は13日の夕方から14、15日の朝・昼・晩と用意します。13日の夕方になると仏様を迎えるために、庭に迎え火たを焚きます。その火から線香に火をつけ、家の門から石塔場・三叉路さんなど墓地までの道の各所に、仏様が迷わずに帰ってこられるように道しるべとして線香を置きながら「迎え火」をします。その後、盆綱を家族で迎えます。辺りが暗くなる頃には殆どほとんどの家の迎え火が済み、墓地に続く道の両側に迎え火の微かな線香の灯りが点ります。

14日には早朝墓参りをします。仏様は家々に帰ってしまっていますが、墓地にある村親戚などの墓に米と茄子・胡瓜きゅうりを細かく刻んで混ぜた物・花・線香等を供えます。また親類や知人などの新盆参りも、おもにこの日に行います。

15日には、上新粉じょうしんこで、きなこだんごを作り、芋からむしの葉にひとつずつ包み、送り火の時に仏様への土産とします。送り火は16日に行く地域もありますが、佐野子地区では15日の深夜、仏様を送ります。庭で送り火を焚き、線香をつけ墓地までの道を線香を置きながら送って行きます。

16日は灯籠流しとうろうです。毎回処分せず冷蔵庫で保管して置いた本膳に供えた物などを葺あしの菰こもに包み、15日に作ったお土産のだんごを添えて桜川へ流していましたが、現在は亀城公園へ持って行きます。



「ごーざった、ごーざった、ほとけさまごーざった」子どもたちの声が大きくなってきました。「ほとけさま、おりらせー」元気な子どもたちのかけ声で、庭から家族が揃い盆綱が用意された部屋に向かって盆綱が差し出され、仏様が降ろされました。こうして盆綱に乗せられて今年も無事両親はじめ代々の仏様が帰って来ました。

盆綱に向かい線香をあげ、手を合わせながら我が家の近況を報告し、実家を後にしました。佐野子地区のお盆の様子を簡単に紹介させていただきました。皆さんはどのように毎年のお盆を迎えておられるでしょうか。

間もなく今年もお盆が巡ってきます。

静かなお盆でありますように……………。

(市史編さん係非常勤職員 國枝文江)

霞 短信

Kasumi-tansin

「霞短信」コーナーでは、博物館活動に関わる方々の声やサークル活動記録などをお伝えしております。

今号は、社団法人土浦市観光協会専務理事の林正一さんにご寄稿いただきました。林さんは、旧新治村にて文化財を含めた社会教育全体を手がけられ、みずらの出土で有名な武者塚古墳の発掘調査から覆屋建設等の整備、『図説新治村史』の刊行など多方面の事業を担当なさいました。

『また来てみたいまち・土浦』

私が博物館に関心を持つようになったのは、35年ほど前です。社会教育主事の単位を取得するため宇都宮大学で博物館学の講義を受けてからのことです。それまでは、博物館や美術館へ行っても、単に展示品を鑑賞するだけでした。しかし、授業の一環で博物館の施設を見学した際に、史料の収集や研究、準備作業に多くの時間と労力を費やす学芸員やスタッフの姿を目の当たりにして、その情熱、プロ意識に心打たれたのです。その後、新治村教育委員会で社会教育兼文化財係を担当することになり、県教育委員会から奈良国立文化財研究所での遺跡保存に関する研修に派遣していただき、さらにイギリスの大英博物館やデンマーク国立博物館で展示方法等について学ぶ機会を与您いただきました。中でも、デンマーク国立博物館で、館長から「我々の博物館は国民の税金で運営されているのだから、専門的知識のない国民の誰もが、図録や解説書を読まなくても、ひと目見ただけである程度理解できるような展示を心掛けているのです。」と聞かされた時、無意識に日本の現状と比較してしまったことを思い出します。また、奈良国立文化財研究所で研修した保存科学の知識を、上坂田地区の武者塚古墳を発掘調査した時に、石室や出土遺物の保存のため活用できたことは、今でも良き思い出として残っています。

今後は、研修で学ばせていただいた経験を、微力ではありますが観光事業推進のため、何らかの形で生かしていきたいと思っています。私が常々考えている観光の原点は、まず「おもてなしの心」で接客すること、さらに地域の協力(地域力・協働)を得ながらまちの活性化を図るということです。博物館周辺には、土浦城址を中心に、江戸情緒が息づく歴史の小径やまちかど蔵など多くの歴史的遺産が残されています。これら観光資源の有効活用を図るため、観光ボランティアガイドや中城倶楽部、中城おかみさん会など関係者の協力を得ながら、「土浦に来て良かった。また来たい。」と思っただけのような、市民目線での観光案内に努めてまいりたいと考えています。

(社団法人土浦市観光協会 専務理事 林 正一)

コラム(12) 博物館屋外展示物「真鍋の道標」

4月より教育委員会文化課文化財係から異動して参りました比毛君男です。宜しくお願いいたします。文化課では、指定文化財や埋蔵文化財等、様々な文化財の保護に関する仕事を行っていました。

今回のコラムでは、博物館から第2駐車場への道沿いに移設された、市指定文化財「真鍋の道標」を紹介したいと思います。この道標は享保17(1732)年に建てられた土浦最古の道標で、本来は真鍋坂上の水戸街道と筑波街道の分岐点にあります。石材は花崗岩、頂部が尖った四角柱状で、高さ約120cm、幅約30cmです。側面には梵字の他、「右 ふちうち(府中、現石岡市) 水戸」、「左 きよたき つくば」等の文字が刻まれています。道標各面の梵字(サク)は、近世において月待供養の本尊とされた勢至菩薩を表します。道標を作ったこの地の人達は、仏の功德で旅人を助け、また現在・未来の安楽を願ったものと考えられます。何気ない石造品にも様々な歴史や思いがこめられています。(比毛君男)

情報ライブラリー更新状況

【2010・7・1 現在の登録数】

古写真 447点(+6)

絵葉書 354点(+7)

()内は2010年5月15日時点との比較です。展示ホールの情報ライブラリーコーナーでは画像資料・歴史情報を順次追加・更新しております。1ページでご紹介した絵葉書もご覧いただけます。

霞(かすみ) 2010年度

夏季展示室だより(通巻第12号)

編集・発行 土浦市立博物館

茨城県土浦市中央1-15-18

TEL 029-824-2928

FAX 029-824-9423

<http://www.city.tsuchiura.lg.jp/section.php?code=43>

1~6ページのタイトルバック(背景)は、

博物館2階庭園展示です。

2010年度夏季展示は、2010年7月1日～9月下旬となります。「霞」2010年度秋季展示室だより(通巻第13号)は10月1日(金)発行予定です。次回のご来館もお待ちいたしております。